松波むかし語り ここに住み続けて その17

今回のお客様

昨年から北島布団店を継いで店を守る

北島　英明さん 78歳 長洲（ながず）

“布団は昔は財産、家が気密になった今は暖房器具です。暮らし方に合わせて選ぶことですね。”

―千葉商信号前の北島布団店は、昔も今も松波のシンボル、北島さんの“ふとん学”はとても奥の深いものでした。

「どんな食べ物を食べているか、寝室は何人で寝ているか、和室かマンションかまで聞いて布団を作っています」―布団は汗と湿気に密接に関係し、畳や木材がなく気密性の高いマンションは、「布団がたくさん汗を吸うので、純綿の布団は乾燥に注意」だそうです。

昭和24年設立当時の
北島綿寝具工場

「北島綿布団店」が千葉商前に1000平米の土地を買って越してきたのは昭和24年、のちに松波町会長を務める父の隆さんが当時千葉商までしか来てなかった電線を引いて工場を始めました。英明さんは昨年急死した兄、隆久さんと二人兄弟、「親父は尋常小学校に1カ月通っただけで奉公に出され、30数種の仕事を転々とした後、布団作りを学びました。当時、布団作りには2派あって、大量生産の『富田派』に対し、父の修行した『伊賀屋派』は天皇家にも納めたという矜持をもってていねいな仕事をしたそうです」。当時、1組の布団を仕上げると1カ月は暮らせたとまで言います。手先が器用な隆さんは伊賀屋派の技術を千葉県中に教え、自ら「千葉布団・綿商組合」を設立して会長を務めました。

「親父は戦後はまったく仕事をせず、山岳会の仕事で1年の3分の2は山にいるような人でしたから、兄と学校に通っていた私とで布団を作っていました」。市内長洲（ながず）の店にいた英明さんは、自転車に10枚ものふとんを積んで松波の工場に通い、できたものをまた長洲の店に運ぶという日課でした。当時、それほど布団の打ち返しの需要があったのですが、ほこりにまみれるつらい作業、「工場に来てくれる人はなかなかいません」。大学で弱電を学んだ英明さんは、隆久さんから「兄弟二人で布団を作ろう」と言われ、「工場も建てたことだしやるしかなかった」と当時を振り返ります。

「落ちた綿くずをかき集めてこしらえても、3年は使える布団は作れますが、とてもそんな仕事はしたくない」というのが職人としての英明さんの誇りです。「良い布団というのは、いい綿をたっぷり入れて、布団皮の縫い目と中の綿の中心線がきちんと合ってるものです。それでないと長持ちはしません」。「昔は布団は財産でしたが、それが家の気密性が高まって暖房器具に変わりました」。だからどんな布団を選ぶかは奥さんの考え方しだいだと英明さん。でも自分の作った布団は30年は保つと胸を張る職人の心が、隆久さん亡き後、毎日長洲から通って店を開け続けるのです。「自分が作った布団が5年先、10年先に打ち返してほしいと持って来られて、店が開いてなかったら困るだろうと思って……」。技術と看板の北島布団店です。

“現代の名工”の店